

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

再版

B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

季刊 連句 第19号



水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 九〇〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 八〇〇〇円

国語慣用句辞典 B5 八〇〇〇円

国語史辞典 B5 五〇〇〇円

日本語源辞典 B5 八〇〇〇円

京都語辞典 B5 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 三〇〇〇円

隠語辞典 B5 三〇〇〇円

近世上方語辞典 A5 二〇〇〇円

花柳風俗語辞典 B5 三〇〇〇円

明治新語俗語辞典 B5 三〇〇〇円

難訓辞典 B5 三〇〇〇円

名乗辞典 B5 二〇〇〇円

名数数詞辞典 B5 二〇〇〇円

あいさつ語辞典 B5 二〇〇〇円

新版ことば遊び辞典 B5 二〇〇〇円

類語辞典 B5 二〇〇〇円

類義語辞典 B5 二〇〇〇円

表現類語辞典 B5 二〇〇〇円

新版文章表現辞典 B5 二〇〇〇円

歳時記について(南柏雑記 17)	1
俳句と発句	2
「市中は」の巻 鑑賞(V)	4
第四回 武翁賞発表(昭和六十二年度)	8
「蓑虫」付勝練習二十韻	12
第七回 俳諧芭蕉忌 第二十三回 猫菫会	14
第一部 正式俳諧興行 脇起り二十韻 初時雨	
第二部 脇起り二十韻 六巻	
捌 梅田 利子 下坂 元子 下鉢 清子	
滝川 雅代 原田 千町 山崎 一恵	
文 豊田 好敏 副島久美子 上月 淳子	
鳴立庵新庵主入庵記念祝賀会	20
こよろぎの集い	下鉢 清子
祝賀二十韻 秋麗ら 七巻	
捌 草間 時彦 坂本 孝子 杉内 徒司 杉江 杉亭	
鈴木春山洞 馬場 彬風 東 明雅	
新庵主主催 膝送り歌仙 黄落期	
柚子の里 柏連句会吟行	北見さとる ... 24
二十韻 四巻	
捌 東 明雅 小林しげと	
下鉢 清子 原田 千町	
百韻を捌いて 関口連句教室	秋元 正江 ... 26
二十韻三巻	
捌 内田 麻子 式田 和子 豊田 好敏	28
連句会案内・雁帛往来	29

歳時記について
南 柏 雑 記 17 雅

俳句の方では、今「季語」の再認識・再吟味が行なわれているようである。さしあたり角川書店の「俳句」が十月号に「最新季語入門——季の魅力」の大特集を行なっているのはその一つの現われであろうが、その原因として、①俳人の急激な増加により従来の歳時記・季寄せの類の記述がまちまちで混乱がおこっていること、②時代の転化が急激なため、死語に類するものが多く、その代わりに新しいものが掲載されていないこと、③俳句が一時平句的になったその反動として季語の効果が認識されてきたこと、などがあげられるであろう。

これは連句にも一応通じる現象であるが、用いる歳時記が各人ばらばらでは、特に連句では具合が悪い。俳句は一句の中での効果が十分であれば、たとえ、それが或る歳時記では春になり、或る歳時記では秋になっていたとしても、その一句の価値にはあまりひびかない。しかし、連句はその一句だけで事が足りるわけではない。たとえば、歌仙の中、最も独立性の強い発句にしてからが、その用いている季語が三春の季語ならば、次の脇句では必ず、初春・仲春

・晩春のように、その季節を定めなくてはならない。また、一度、季語が出たら、春・秋は三句までは続けなくてはならず、五句までは続けてよいことになっており、夏・冬は一句で捨ててもよいが、三句まで続けてよいことになっている。

この場合、季戻りということは許されない。それはたとえ、打越に晩春が出て、前句に仲春が出て、付句に初春が出るような、季節の進行と逆の関係で付けられることである。晩春・仲春の季語と言っても、その差は微妙であろうし、一例をあげれば、梅は初春・木蓮は仲春・桜は晩春と大低の歳時記にはなっているけれども、たとえば、信州などではこれが一度に咲いているけれども、たとえば、季戻りもあまり厳密には言えぬところもあるが、たとえば、メーデー(晩春)の付句に立春(初春)の句が付くなどは、常識で考えてもおかしいのである。

私ども、A・C・Cや猫菫や、その姉妹の結社では文芸春秋社版の山本健吉編「季寄せ」を使っている。それは三春・初春・仲春・晩春などを、はっきり明示していて、問題が出た時調べるのに都合だからである。俳句と連句とは異なるのであり、俳句の歳時記も問題が多いのだから、この際、新しい連句歳時記の必要性を痛感する。それは最も基礎的なものを中心に、あとは類推でやれるようなものを作る必要があると思う。

俳句と発句

草間時彦

現代連句のなかの発句がどうあるべきかについて考えてみたい。

発句は連句の第一句である。第一句に過ぎないから、三十六分の一の力しか持っていないと考えるのは早計である。占めている位置は三十六分の一かも知れないが、その重要性は別段である。発句の在り方を考える前に、正岡子規以後から現代に至る俳句を見てみよう。

正岡子規を考えると、明治の文明開化という時代を無視することは出来ない。正岡子規は明治の俳句革命の旗手であり、偉大な革命家だった。子規はたまたま朝敵の松山藩に属していたので、政治の面での仕事をすることは出来なかった。それで、文学の面の革命家になったと言ってもいいと思う。それは俳句であり、短歌である。小説の部門でも活躍しなかったのだが、残念ながら子規の力ではどうにもならなかった。革命とは旧勢力を打倒することである。俳句の場合の旧勢力とは各地の宗匠であり、俳諧師だった。そして、これらの人々が人格化し、偶像化していた芭蕉をたいた。芭蕉に替るものとして蕪村を讃えた。

子規は余りにも早く死んでしまったので、その革命は途次で終わってしまった。破壊のあとと建設にまでは至らな

った。もし、子規が長生きをしたら、彼は連句について何を言ったであろうか。そのあたりは大いに興味があるが、どうにもならない。

子規から攻撃された旧勢力の人達は、芭蕉の本当の偉さを直視する能力が欠けていた。子規に対して、説得力のある芭蕉論を展開する能力を持っていなかったのである。もっとも、明治時代の文学理論から、どこまで芭蕉を解明出来たかどうかはあやしいものである。正岡子規の芭蕉攻撃にしても幼稚なものだった。

私は明治時代における旧勢力の実態を見誤ってはいけな

いと思う。それは大勢力だった。そして、子規の日本派俳句は小勢力に過ぎなかったのである。昭和四年刊の改造社『日本文学全集』第三十八篇『現代短歌集・現代俳句集』を見ると高浜虚子らに交って月の本為山などの旧派の庵号を持つ俳人が十七名加っている。これを見ると、昭和になつてからでも、旧派の力が如何に強かったかが判るものである。

明治以後の連句が衰退して行った原因はいろいろあると思うが、私はその一因として次のことを考える。それは、西欧の文明が流れ入って来た明治。西欧文学は個の文学で大正以後の俳壇の指導的立場にあった高浜虚子は連句には多少の興味を持っていたが、座興としてのたのしみ以上のものではなかったようである。大正から昭和にかけて、ホトトギスにあらねば俳句にあらずという一大權威を築いた高浜虚子である。その虚子の連句に対する態度は、ホトトギスの人々の連句への無関心を強要するものだった。虚子の句で注目したい句がある。

* 川を見るバナナの皮は手より落ち 虚子

* 荖右往左往菓子器のさくらんぼ

こういう句を一部の人は痴呆俳句であると攻撃した。私は痴呆という言葉に必ずしも賛成出来ないのだが、その門下の「早乙女の赤い嚔にちよと惚れた」というような句になると、まさに痴呆である。その価値を云々するよりも言わなければならないことは、連句の発句にはならない俳句だと言ふことである。俳句が即ち連句の発句であるということは「ホトトギス」の俳句の大衆化によって、もろくも崩壊した。発句の持つ格調の高さというものを、俳句は捨ててしまったのである。

昭和初期に富安風生が口語的発想の俳句を試みたことがある。

* 街の雨鶯餅がもう出たか 風生

* 退屈なガソリンガール柳の芽

このあたりから、俳句は発句性を失ったのだろうか。そして、非発句の俳句が現代の俳句の主流となって来た。現代俳句は発句と平句の区別がなくなってしまう。連

あり、個の詩であって、そこには座の文学という考えはなかった。もとより、座の詩という思想もなかった。連句という座の文学は文明開化の浪に乗ることが出来なかった。俳句の場合は、子規の革新、子規没後は河東碧梧桐の新しい俳句の運動があり、これは後に尾崎放哉や種田山頭火の自由律に発展する。そして、文明開化も落着いた大正に入ると、高浜虚子の守旧派が俳壇を制するようになる。つねに指導者がいて、優れた作者を生んで行った俳句にくらべて、連句の世界には卓越した指導者が居らず、優れた作家も生れず、徒らに老齢化して行ったのである。

芭蕉から明治まで二百年、あれだけの力を持っていた連句が明治以後、急激に衰えて行ったことは、もっと、いろいろの角度から探究してみることが必要のようだ。文学的でなく、社会現象として捉えることも一つの方法である。

余談になるが、明治以後の日本の芸術は、大なり小なり、西欧の影響を受けている。文学の場合、自然主義文学の影響を無視することは出来ない。それが、連句の場合、衰えたまま、大げさに言うなれば、無菌状態で冬眠していたのである。だから、現代連句は眼が覚めたばかりなのである。眼が覚めて動き出したばかりだから、汚れていない。しかし、このままというわけにはいかないであろう。型式もさまざまに乱れるであろうし、内容的にも多彩となり、日本文学以外の異文学が流入すると思う。又、連句界内部の人間関係も円満とだけはいくまい。これは余談だが、私はそんな気がしている。

句の平句としか考えられない五・七・五が俳句として通用しているのが現状である。

別の角度から見れば、口語的俳句や平句的俳句によって、俳句は一般大衆に親しみ易いものになった。俳句が格調の高さを誇っていたのなら、一般の人にとって、俳句は近付き難いものとなっていたであろう。俳句の基礎的方法を学ぶことの乏しい俳句が増すに従って、俳句はますます格調の高さを失い、平句的になって行ったのが現代俳句の姿である。

そのことを具体的に言うなら、切字を使わない俳句が多くなった。切字を使えない俳句が多いということである。本来ならば、切字を使ってこそ俳句なのである。

連句の第一句は季題が入っていて、切字が使われていないければいけない。それでこそ、連句の第一句は発句であって、俳句なのである。連句の第二句以降の平句は、例え、

「市中は」の巻 鑑賞

東明雅

それに季題が入っていたとしても、俳句にはなり得ない。野鴨の子は野鴨であって、白鳥とはなれないのである。平句が一句として独立したときは、雑俳となるのである。現代俳句は混乱している。発句から絶縁した場に俳句が存在しているようだ。平句のような俳句、雑俳のような俳句、口語的発想の俳句、さまざま俳句が多いなかで、連句人が俳句を学ぶにはどうすればよいか。本稿の命題はそれだったのであるが、さて、どういう返事をしたらよいのであろう。

私は、前に連句界も先々は混乱するであろうと書いた。隆盛になり、しかし、混乱している連句の世界で、猫藪会が指導的立場にあるためには、どうあればよいか。それは連句固有の方法を捨てぬことである。それと同じことが発句についても言える。俳句固有の方法を守ることだ。私は

(終)

11 ざる引の猿と世を経る秋の月

蕉

12 年に一斗の地子はかる也

(雑。他の会釈)

(現代語訳) 猿を相手に月を見てくらすしがない猿曳も年に一斗の地子は納めねばならないのだ。

活と、題材は変化しているが、わびしい気分は裏の八句目から続いている。

(補説) 地子という語は鎌倉時代あたりから用いられた古い語で、後には毎年二季に、銭、銀、米、雑穀などで収めたという。この猿曳は田畑を耕して、その収穫の何割かを上納するというのではなく、彼のもつ土地(山林・宅地)に対する税の意で、米一斗分の銭で払ってもよいのである。

「年一斗の地子」は貧しい猿曳の生活の実態を明らかにしようとする意味の付けではなく、むしろ猿曳というような人も、人間として生存するからには相応の課税を果さねばならぬという、世の姿を描いたもので、いわば渡りにくい世の観想と見るべきだろう。だから、「律義に年貢を納められるのは、それなりの喜びであり、一句には、そうした心意気のようなものが感じられる」(日本古典文学全集・連歌俳諧集所収)という解釈には賛成しかねる。ことに猿曳のおかれた当時の社会的地位を考えると、尚更わびしさが先に立つのである。あるとすれば、猿と猿曳とが一所懸命に年貢を納めるベソソスであり、おかしみである。

「湯殿は竹の簀子佗しき」の句からこの句まで五句、しつとりとした、さびの世界が展開され、猿藪の最も猿藪らしい一連ということができよう。それだけに転じはあまり大きくはないものの、句それぞれにあわれ、おかしみ、さびしみがこもごもで、一句ごとの細かな気分の推移を味わうべきであろう。

12 年に一斗の地子はかる也

来

1 五六本生木つけたる瀧

兆

(現代語訳) 五六本の生木をつけた寒村の水たまり、ここは年に一斗の地子を出すのである。

(付心) 其場の付け。前句に軽く添えた付け方で、裏八句日あたりからの緊密な付合の気を抜いて、名残の折らしい人情なしの句で変化を出した。前句に田舎の小百姓らしい気分があるので、辺りにありそうな景であしらった。

(付味) 僅かに年に一斗の地子を含めるといふ前句の貧しげな余情を受けている。能勢氏は「うつり」と言っている。

(転じ) 打越と貧寒な気分は似ているけれども、打越は観想の句であり、この付句は写生的な叙景の句となっている点に、新しい転じが出た。

(補説) この瀧を水はけの悪い道に生木を人が通るため投げこんである所と見る説も多いけれども、次に続く三句が何れも道路と関係があるので、この句までも道と見るのは、具合が悪い。これは用材の脂を取るために、浸けてある小さな池みたいなのであろう。瀧という難しい文字を使ったのは、二句あとに水という字が出たため、嫌ったものである。

1 五六本生木つけたる瀧

兆

2 足袋ふみよごす黒ぼこの道

蕉

(雑。人情自)

(現代語訳) 五六本生木をつけた水溜りの辺りは、黒ぼこの道も湿っていて、足袋をよごしてしまった。

(付心) 起情の句。前句の場の続きで、前句にぬかるみの感じがあるので、それに付けた。

(付味) 生木のつけてある水溜りを眺めながら、その傍の黒ぼこの道を通っていると、足をふみそこねて、足袋を汚してしまったという、前句の景を軽く受けて、人情の句にかえたものである。心付的なところがある。

(転じ) 前句まで続いた、わび、さびの気分から離れ、軽い失敗を自嘲する気分がある。

(補説) 足袋は現在は冬の季語であるが、それは天明ごろ以後で、元禄のころはまだ季語となっていない。黒ぼこは「くろぼく」とも言い、火山灰や軽石が風化してできた黒い土。

2 足袋ふみよごす黒ぼこの道

蕉

3 追たて、早き御馬の刀持

来

(雑。人情他)

(現代語訳) 馬を飛ばしてやって来る武士の刀持に追い立てられて、黒ぼこの道で足袋をふみ汚してしまった。

(付心) 向付。足袋をふみよごした人に対して、早馬を駆りたてる刀持をつけたもの。

(付味) 心付的で、足袋をふみよごした理由を述べているようだが、句調がよく、すっきりした気分が感ぜられる。

(転じ) このあたり、ずっと貧しい、うら寂しい気分の句が続きすぎている。それを打破する為、この颯爽とした早馬の武士とそれを一散に追う従者の凛々しい姿を出したものであろう。この原句が「お馬にはやり持ひとり付ぬらむ」で、それが芭蕉によって、このように添削され、改案されたことは天野雨山の指摘する通りで、原句ならば消極的なわびしい気分がなお残って、結局、この作品の命取りになったであろう。だから、芭蕉は思い切って改案したものと思われる。

(補説) 雨山は、足袋ふみよごす者を刀持と見ているが、これでは逆付(時間的に付句が前句よりも先)であり、次の付句が「でつちが荷ふ水こぼしたり」であるから、全くの扉付となる。(両方とも人情他)これを通行人の自と考えても、なお扉付の気分は否定できないが、敢えて、それを犯しても、芭蕉は一卷全体の気分の変化を図ったのである。ここで、原句の「お馬にはやり持・・・」を付ける方が前句への付味はよいだろうが、一卷全体の活気が消失する。そのあたりを商量して、芭蕉はさぞ苦心し、頭が痛かったことだろう。

3 追たて、早き御馬の刀持

来

4 でつちが荷ふ水こぼしたり

兆

(雑。人情他)

(現代語訳) 殿様の早馬のあとを追って走って来る刀持の勢に、丁稚はかっぴいでいる桶の水をこぼしてしまった。

(付心) 向付。刀持に対し、丁稚を付けた。

(付味) この句は昔から評判が悪い。露伴などは、「興も味も乏しく、前句と同じ床屋俳諧の祖となれるもの」とまで酷評しているが、中には太田水穂や能勢朝次のように「ひびき」の付けと見ている人もある。私には両者とも極端な言い方だが、伊藤正雄が「この三句、拍子にのりすぎ、風韻に乏し」という位が適切だと思われる。しかし、拍子に乗らねばならぬ理由があったことは既に述べた通り。

(転じ) このところは、昔から観音開きの句としてこの一卷中の瑕瑾とされている。「打越の十分の従者から、町人の丁稚へという人物の転換、また田舎道から都会の街筋への移動、さらに自、他の変化のある点などから、この付句も承認されたであろう」(日本古典文学全集・連歌俳諧集)とあるが、打越、付句の転じよりも、更に大きな一巻の転じがこでなされたことが、より大切であろう。

(補説) 去来抄によれば「でつちが荷ふ水こぼしけり」は、初めは糞であったという。凡兆が「尿糞のこと申すべきか」とたずねたら、芭蕉が「嫌ふべからず、されど、百韻といふとも二句に過ぐべからず、一句なくてもよからん」と言ったので、凡兆は水に改めたととなっている。

俳諧では、詩、和歌、連歌が取り上げなかった題材もとり扱う態度で一貫している。これは、醜を醜として取り上げるのではなく、それを全体の美意識の中に取りこむのが蕉風の行き方であった。また糞では、ますます田野の景に近くなるのを恐れたせいもある。

4 でつちが荷ふ水こぼしたり

5 戸障子もむしろがこひの売屋敷

(雑。人情なし)

(現代語訳) 戸障子を席で囲った売屋敷に、勝手に入りこんだ他家の丁稚が、井戸の水を汲んではこぼしながら運んで行く。

(付心) 丁稚が水をこぼす其場の付け。

(付味) 売りに出されている家が、それでも荒れ果てないように戸障子を席でかこってある、その景にはわびしさがある。主人は居なくても井戸の水ばかりは昔のままに清らかで、曾ては楽しく家人が使っていたであろう自慢の井戸を、今は他家の丁稚が遠慮会釈もなく、水を汲みこぼしているのを見ると、一層に人の世のあわれ、わびしさが胸にせまる。何でもない叙景の句であるが、しみじみした情感のただよう句となったのは、水を汲む丁稚と、席がこいの売屋敷の位の付けである。

(転じ) 前三句が騒々しい句であったのに、ここでは一転し、しんみりとした句になった。

(補説) むしろがこひは、①雨戸も障子もなくなつて、むしろで囲われている家。②建具を席で覆い包んだもの、③買手が決まり人が覗かぬように席でかこつた家という三つの解釈がある。③は問題外である。大体①の解が多いが、雨戸も障子もなくなつた家を席で囲うか疑問である。むしろ、豪家が没落して、上等な戸、障子を惜しんで席で囲つたものと見るべきではあるまいか。

二十韻 初懷紙

秋元 正江 捌

武翁賞応募

作品一覽

隣より謡きこゆる初懷紙

飾納の古りし式台

ファミコンのソフト発売待ちかねて

摒いっばいに漫画描く子ら

木下道月の出を待つ人と犬

かまきりを見てさめてゆく恋

愛憎の糸の絡まるそぞろ寒

お縄頂戴金の延棒

スペインかカナダが終のマイホーム

プールの青に空の蒼浴け

疼きぬし虫爾不思議に鎮もりて

新人類僧檀家殖やしぬ

許されぬ女が成果の留学生

朝な夕なにくちづけが義務

鴨の夢ゆらゆら揺れて月遠し

根雪となりて地酒温む

半世紀暮らし慣れたる街変り

春の公園草野球終へ

花篝ゆきかふひとを浮きたたせ

きらめく針魚ならぶ大皿

昭和六十二年一月十六日

於 電通南寮

連衆 山口美恵・鈴木 茂
佐古英子

正江

美恵

茂

英子

茂

恵

子

茂

恵

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

歌仙

一行く秋

二 落し角

三 師走風

四 天壇

五 牡丹

六 夏衣

七 水澄むや

二十韻

膝送り

麻子捌

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

連衆

東夷

定史

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

良子

遊

隆秀

好敏

和子

淳子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

遊

隆秀

好敏

和子

淳子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

遊

隆秀

好敏

和子

淳子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

遊

隆秀

好敏

和子

淳子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

選後に

草間時彦

今年の武翁賞は応募作品が質的に劣っていた。残念だが、授賞作なしは当然のことである。

私は秋元正江さんの再授賞を主張したが、捌きの再授賞は避けたいという東、杉内両先達のご意見に従った。秋元さんの場合、同じグループを連衆として、他の人が捌いている作品の応募があったが、出来栄えに格段の差があった。連衆から佳句を引出す能力こそ、捌きの第一条件なのである。

東 明 雅

歌仙の応募は七篇、その中二篇は膝送りであった。同じく膝送りと言っても、連衆の質が揃い、割に小人数のところは捌格の人が居なくても成り立つが、ベテラン、新人こまきまで、人数も多いのは、どうしてか目立って、安定性がない。これは今後もあることだから注意して貰いたい。四番のは亡き香歩先生の句が交じっているから番外として二・三・六・七はちゃんとした捌きが居られるせいか、その点の難は

免れている。しかし、いずれも、それぞれ

自他・内外がうまく整っていなかったり、

余りにも強い個性が全体の調和を破っている

ような点が顕著であった。

二十韻の方は五篇、今年は電通の方が張り

ききって四篇を出して下さったのはうれし

かったし、進歩しているのも認められたが、

やはり捌きとしては3が、同じ電通のメン

バーを連衆としながら一応纏っていること

は、三人の齊しく認めるところであった。

1は初捌きとしては上々で今後を期待する。

のものばかりであったが、賞なしでは残念

であり、来年度からの応募の奨励にもなる

ので、歌仙、二十韻ともに各一篇を佳作と

して発表することで一致した結論になった。

応募作品のリストをつくる。今回は十二

篇にすぎない。膝送りが二篇、同じ捌きに

よる作品が二篇、つづつあるので、節にかけて

一つを残す作業を試みる。

まず、膝送り「行く秋」「牡丹」をよむ。

双方とも八人と七人による膝送りのため、

四つの面に区別がみとめられない一本調子。

膝送りは五人位まででなければいい作品

が出来ない。七・八人でもすぐれた指導者

が加わっていれば別だが。

「落し角」「師走風」双方とも連衆多数

だが、捌きがあるので膝送りに較べてやや

よい。「師走風」を採る。

「夏衣」「水澄むや」、どちらも佳句が

多く、変化があつていいが、「水澄むや」

を採る。

二十韻では「春惜む」より「風の道」を

採る。

二、三日後、残った六篇をよみ直し、「水

澄むや」「師走風」「風の道」を推すこと

に決める。

さて選考日。一次選考で三人の推す作品

が一致した。二次選考はやや難航。最終討

議では、私は作品に現われていない日頃の

力働を力説して「水澄むや」を推したが、

付方自他伝的にみると欠点もあり、受賞に

到らなかった。

選考は一時間にすぎなかったが、一人の

指摘に他の二人が同感を表すという審査ぶ

りで、連句に寄せる思いが一致しているの

が自らわかって楽しかった。「水澄むや」

が今年の準受賞作となったのは、武翁賞の

幅を広くしたという意味で私は満足した。

蓑虫

付勝練習二十韻

東明雅

切 句 締 投
1 月 20 日

脇起り

立句 蓑虫の音を間に来よ艸の庵

芭蕉

脇句

治定 初めて涼し掛けし濡縁

正雄

1 夜寒の壁にうつる人影

正江

2 硯洗ひて据ゑし文台

隆秀

3 束ねて壺にさす吾亦紅

元子

4 萩こぼしつ訪へる柴垣

妙子

5 桔梗活けて客を待つ床

良子

6 わらぢの鼻緒ゆるびやや寒

弘次

7 止まる雀にゆるる紅萩

治子

8 菅門くぐり苔の飛び石

遊哲

9 ひとくくりして門の溝萩

鋭太郎

10 藍皿に盛る庭の無花果

井田 淳子

11 笹に挿しくる苞のなめたけ

千町

12 露時雨踏む畔の近径

天留子

13 昨日替へたる障子白々

慶子

14 新酒一本下げて夜の道

休耕の田にげんげ時き終へ

15

なんばんぎせる咲きいでし庭

千雪

16 秋海棠の咲ける庭先

杉亭

17 紫苑の揺れに落ちるくぐり戸

みづゑ

18 秋の名残の尽きぬ盃

雅代

19 蔓たぐりして腕のにぎはひ

澄子

20 濁り酒あり母の手作り

あかり

21 萩散りかかる蒼き庭石

光子

22 紅葉かつ散る陶の躑

清子

23 庭の茂みのほのかなる月

徹

24 かすかなる糸ゆらす秋風

美和

25 躑の上光る白露

智子

26 松の手入もはや済みし庭

美鈴

27 木犀の香の匂ふ庭先

美幸

28

この芭蕉の立句は貞享四年秋の作。この句の前書に「聴閑」とあり、「葉集」や「一葉集」には「草のとほそに住みわびて、秋風の悲しげなる夕暮、友達の方へ言ひ遣はしける」と前書がある。「続虚栗」によれば、この句の次に嵐雪の「聞に行きて」という前書で、「何も音もなし稱うちくひて蚤哉」という句が出ているから、おそらく、深川の草庵から嵐雪に贈った句だろうと考えられているが、伊賀上野の門人服部土芳が庵を結んだ時、元禄元年、芭蕉はここを訪れ、この句を贈ったので、この庵を「蓑虫庵」と号した。

蓑虫が鳴くというのは、例の「枕草子」四三段に書か※

※れた、蓑虫が鬼の捨子で、「八月ばかりになれば、ちぢよ、ちぢよとはかなげに鳴く、いみじうあはれなり」という有名な話から来たもので、実際は鳴かないというのは周知の通りであるが、芭蕉としては「葉集」や「一葉集」の前書にあるような情感で作ったものだろう。秋の夕暮、草庵の閑寂さを愛すと共に、心の友を求めた芭蕉の気持を察して、脇の句も応ずべきであろう。

1はまさに閑寂の心を現実の姿に現わしているが、あまり寒々として挨拶の意がないのが残念である。2の硯も文台も草庵から出たもので、決して身柄のある句とは言えないが、何か道具立が多すぎる。3の吾亦紅も寂しい花であるが、前句の艸に付きすぎていないか。4・5も同じである。6のわらぢの鼻緒がゆるんだのは客のわらぢであろうか。おもしろい所に目をつけたが、やや前句への付味がわるい。7は虫に鳥、艸に紅萩で賑かすぎる。紅萩だと艶で前句の閑寂にあわない。8は萱はもちろん三秋であるから、発句が三秋の時は脇では避くべきである。9も庵に門、艸に萩では如何か、もちろん、脇の句は発句にべた付けでよいのだが、もすこし、余意、余情をとらえてもらいたい。10も景は分かるが、藍皿の印象が強すぎる。11はまた変った景をとらえたものである。主人が客を待っているのに、客はなめたけを苞にして来たという向付の手法であるが、すこし身柄(発句の余意・余情以外のもの)が入っているような感じがする。12秋の立句の場合、月が脇か第三に出るのだから、ここで露時雨を出されると

第三の月が出しにくくなる。13もよいが、障子白々というところに何か浮き浮きしたものが感じられないだろうか。14発句の存問に対する応答の句、それはよいが、新酒という語の感じがすこしはなやかではなからうか。15は身柄がある(発句の余意、余情以外のもの)をもちろし出している。16・17・18は同じようにこの艸庵の庭の草花を出している。これは別に身柄がある句ではないものの、なんばんぎせるはよい気分だが、「尽きぬ盃」はやや付味が悪い。20の「にぎはひ」も同様である。21の「母の手作り」もやや身柄がある。22・23はよく似た句であるが、23も美しすぎる。24はこのままで三秋の月である。25の秋風・26の露も、発句の三秋に三秋の季語を付けている。これらはもすこし工夫すれば何とかなるのが惜しい。27の松手入は晩秋の句だから、その点はのがれているが、蓑虫のぶら下っている草庵で、松手入をするとは位が違ような感じがする。28も同じで、発句の他人の住む草庵に、甘い香りの木犀はやや不似合の気がする。

治定の句は、蓑虫の音を聞きに来いと友に呼びかけているのに、お宅の濡縁に掛けると暑かった夏が去り、いよいよ秋めいて気持ちのよい感じがしますと、挨拶しているところがすばらしいので頂戴した。次は当然月の句を出すべきだが、新涼が初秋であるから、なるべくなら、中秋の月がよいのだけれども、三句、同じ気分・境地が続かぬようにするために、あるいは三秋の月を使って一工夫するのも絶対に悪いとは言えない。頑張ってもらいたいものである。

第七回俳諧芭蕉忌

第二十三回 猫蓑会

恒例の芭蕉忌を十月二十一日(水)深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を厳肅な中に和氣藹々と興行した。その後、二十韻六巻を首尾した。

(一) 次第

参加者 三十三名

第一部 正式俳諧興行

脇起り二十韻

初時雨

第二部 脇起り二十韻 六巻

- (一) 木枯や 梅田 利子 捌
- (二) しぐるゝや 下坂 元子 捌
- (三) 口切に 下鉢 清子 捌
- (四) 振売の 瀧川 雅代 捌
- (五) 冬籠り 原田 千町 捌
- (六) 旅人と 山崎 一恵 捌

- 一、席入り (知司の指図により座見・座配の役)
- 二、配硯 (重ね硯を配る)
- 三、供華 (花司)
- 四、執筆呼出 (宗匠)
- 五、文台捌 (執筆)
- 六、俳諧興行 (知司挨拶のあと連衆付句)
- 七、花前 (執筆)
- 八、献香 (香元・宗匠)
- 九、花の句披露 (宗匠・執筆)
- 一〇、端作り (執筆)
- 一一、吟声 (執筆)
- 一二、文台返し (執筆)
- 一三、挨拶 (知司)

初時雨

東明雅 捌

初時雨猿も小蓑を欲しげなり
 冬構へする鄙の家々
 職人は一代修業を誇らかに
 ゆっくり掩れる煎茶湯ざまし
 お太鼓の形を月にたしかめて
 桐のひと葉に彼の靴音
 さされたる盃過すそぞろ寒
 ここは異国青き大地よ
 擬装され航空基地の滑走路
 宰相レース誰も譲らず
 沢蟹の苑の宴会賑やかに
 軒はなれたる月の涼しき
 待つ身にはトランベットの物憂くて
 五角にもなる恋の鞘当
 株暴落七銘柄は値の上がり
 豆粉々にくだくすりばち
 腰痛に電気治療を日課とし
 出開帳には老も楽しき
 大川に水脈きらめきて花びより
 北へ北へと帰る雁

杉亭 翁
 千江 町
 正江 子
 和子 子
 みづゑ
 尚子 子
 麻子 子
 あかり
 淳子 子
 清子 子
 正雄 子
 孝子 子
 隆秀 子
 雅哲 子
 久美子
 元子 子
 明雅 子
 執筆

(二) 役割

宗匠 東明雅
 脇宗匠 杉江亭
 執筆 豊田好敏
 知司 秋元正江
 副知司 中島啓世
 座見 内田あかり
 座配 中田麻子
 花司 副島久美子
 香元 上月澄子
 配硯 八角澄子
 解説 杉内徒司

木枯や 梅田利子 捌

しぐるゝや 下坂元子 捌

口切に 下鉢清子 捌

木枯やたけにかくれてしづまりぬ 翁
 一斉に翔つほや鳥の群 利子
 男衆は塙の半分修理して 好敏
 子供相手に尺の説明 弥生
 京育ち月見団子もほんなりと 香
 薄もなびく吾もなびかむ 久美子
 笑ひ茸でくの茸喰ふ年増振り 澄子
 寺に応挙の幽霊の軸 敏
 芸大も百年たちて記念展 香
 キヤビキヤビギヤルのミニのスカート生 久
 ヘルシヤ湾石油引火を恐れつつ 久
 月夜海亀産卵の浜 敏
 ふり返り帰る姿のいとほしく 澄
 娘を嫁がせて一人酒呑む 香
 樹水林時に陰りて粉雪舞ふ 澄
 旅行カバンに入れし胃薬 生
 惚け出した母の話に面くらひ 久
 おぼつかない氣に小猫泣き出す 香
 十重二十重花懐に抱かるる 利
 上り鮎待つ友酌の糸 敏

しぐるゝや田のあらかぶの黒む程 翁
 冬構して濡るる小庇 元子
 珈琲の豆碾く音の軽やかに 孝子
 ざっと読みたる今朝の新聞 正雄
 火の息を吐きて玉兎と機は飛べり 啓世
 駈落の果敗荷の街 哲
 記念日のサラダにききむマッシュルーム 孝
 パーボンをつぐ太い指先 哲
 退院を喜び友の集ひ来て 雄
 いつもひと言多いわたくし 孝
 日傘さしまなじり決し炎天へ 世
 京の梵妻鱧ねぎる月 孝
 寄り添うて来しその宵の香妖し 雄
 伴の部屋に貼ったマドンナ 哲
 バイト代つぎこんだ株半値割り 同
 雪男見る夢も幻 孝
 鳥葬に空をかけゆく魂よ 世
 終列車待ち子猫抱く人 雄
 花の下太棹叩く撥さばき 元
 若布したたる涙のさざ波 世

口切に堺の庭ぞなつかしき 翁
 縄新しき霜除けの松 清子
 有段者打つ石音も静かにて 明雅
 寝箱の仔犬そつと無でやる 正江
 望の月アールヌーボーガレの玻璃 みづゑ
 刈萱分けて尋ねたる彼 杉亭
 より添ひて菊吸虫となり吸ひぬ 玄
 火伏の神の目鼻すりへり 江
 暴落の株に自棄酒ワンカッ 雅
 棚のへそくり寡婦の心痛 亭
 あるじ顔してのっそりと囂 雅
 更衣してせいせい月の月 江
 海坊主のっぺらぼうをひもとして 雅
 お先にお風呂使つてちようだい 子
 破れ鍋をあきらめて今町住ひ 亭
 そつと開けたるホスピスのドア 江
 高橋の山鳩の声ものうげに 玄
 ぞつき本など積める荷風忌 同
 揺り椅子に刻の移るふ花吹雪 子
 よけつつ歩く春泥の道 亭

ゑびす講 瀧川雅代 捌

冬籠り 原田千町 捌

旅人と 山崎一恵 捌

振売の雁あはれ也ゑびす講 翁
 息白くして飴しやぶる子等 雅代
 温泉の煙過疎の部落にたちこめて徒 司
 湖の細波よせるキャンプ場 彬風
 蛇の殻見つけし木立月しろく 麻子
 だまつたままで以心伝心 弘子
 オフィスラフ廊下の角のすれちがひ 風
 転勤辞合すべてジ・エンド 麻
 電線に止まりし鳥があと鳴き 司
 総裁選び決まる竹下 風
 暴落の株にあわてぬ未し人 麻
 神棚祀る日課かかさず 弘
 どつさりと栗が届きし宅急便 麻
 玉兎に向かひ感謝する猫 司
 稲架陰でそつとふれ合ふ唇と唇 弘
 Uターン同志やつと結ばれ 風
 マラソンの折返し点人の垣 司
 白酒の酔急にまはりて 弘
 伊達眼鏡はづして仰ぐ花の枝 代
 蛙びよんぴょん跳びはねる土手 麻

冬籠りまたよりそはん此はしら 翁
 庭の芭蕉も霜除の藁 千町
 子等の描くクレヨン色彩あさやかに 隆秀
 コーヒータイム焼きしクッキー 淳子
 月代に過疎となりたる湖の町 あかり
 妻呼ぶ鹿の声の響ける よしえ
 踊りの輪つぼまる時にぐつと抱き 子
 年上およし揉め事の種 子
 漆刷毛女の髪を梳き固め 子
 酒弱くしてすぐ眠る餅 秀
 振る賽が丁ばかりとはめん妹な 同
 レーニエ公の融けぬ長恨 子
 パイパスに添ひ雛粟葉の揺れ揺れる 子
 むしを殺して藤椅子の月 子
 総裁戦明ければ株が暴落し 子
 駅の乞食の不尽の夢 子
 銭湯につかりしみじみ富士の山 秀
 自分史書かん鳥雲に入り 子
 ひもろぎの花や枝垂れて笑まひます 町
 土の香高く田返しの人 え

旅人と我名よばれん初しづれ 翁
 思ひがけなく爐開きの客 一恵
 幼らの穂つく音のはずみみて 和子
 爪からまる猫のじゃれごと 弘次
 見返りの塔上り来る月着し 郁子
 コスモス垣のかげの逢引 瑞枝
 若すぎてヒモ持てあますそぞろ寒 和
 そばやの箸のささくれ割れ 弘
 話し合ひ本音建前使ひ分け 瑞
 ひとり虚しく金箔の酒 和
 津軽なる棟方志功記念館 郁
 そろひの浴衣肌ぬぎの月 和
 短夜の夢に妖しき女の来ぬ 瑞
 覚えなきまま認知迫られ 同
 海山を越え外国へ一っ飛び 同
 アタッシュケースに暴落の株 同
 御祝儀とやたらにつつむ老の癖 和
 広き芝生に蝶のもつるる 郁
 花小袖衣桁に掛かる公卿屋敷 和
 朱塗りの籠飼ひぬ鶯 弘

